

# 京都留守居研究覚書

——藩邸・御用・縁家——

浅井良亮

## 〔抄録〕

本稿は、近世京都に於ける大名家の拠点・御用・縁家について、佛敎大学図書館所蔵「新発田藩 京都留守居役 寺田家文書」を活用することで、それぞれの実相を検討するものである。この作業を通じて、近世京都で展開された公武関係について、理解を深める一助となることを目指す。検討の結果、次のことが明らかとなった。拠点をめぐっては、一般的な「京都藩邸」という画一的印象に対し、多種多様な様相の存在を指摘し、三つの類型を提示し

た。御用については、主に公家への使者勤や彼らに関する情報収集などが期待されたことを明らかにし、公武関係の中で極めて重要な位置を占めていたことを指摘した。縁家とは、婚姻関係で結ばれた姻族を指し、さらには姻族を通じて広がる血族の人びとも含めることを究明した。

**キーワード** 京都留守居、藩邸、京都御用、縁家、新発田藩

## 序

本稿の目的は、近世京都をめぐる大名家の諸相について、幾つかの基本的事柄を検討することにある。より具体的には、大名家の拠点・御用・縁家のそれぞれについて、その実態に即した事例を提示しつつ、その在り方を検討するものである。この作業を通じて、近世京都で展開された公武関係の位置について理解を深める一助となろう。

主に用いる史料は、佛敎大学図書館所蔵「新発田藩 京都留守居役 寺田家文書」である。本史料については、既に紹介の稿を記している<sup>①</sup>ので、そちらを参照されたい。

## 第一章 拠点

### 一 京都藩邸について

大名家は江戸や大坂などの主要都市に屋敷を構え、国許から派遣さ

れた家臣の活動拠点とした。こうした拠点は、「藩邸」という用語を以て理解が進められてきた。朝廷が所在する京都にも藩邸が設置され、それらは「京都藩邸」と呼称されている。

京都藩邸は、①公儀よりの拝領屋敷、②町人から買得あるいは借用した屋敷地、に設置されたという。そこに国許から派遣された「京都留守居」が詰め、朝廷や公家との交際活動を展開した。以上が、京都藩邸に付随する一般的理解であろう。

ところで、近世を通じて都市の開発が進む京都に於いて、藩邸に転化できるほどの屋敷地の確保は容易だったのだろうか。幕末、將軍家茂上洛への随従や禁裏御所の警衛など、さまざまな目的で多くの大名が入京した。彼らの多くは、自らの藩邸ではなく、寺院などの宿坊を借用して滞京した<sup>②</sup>。恒常的施設である藩邸が、滞京のために新設あるいは拡充された例は僅かである。このことは、近世京都に於いて、新たな屋敷地の確保が困難であったことを暗示している。

ここでは、京都に於ける大名家の拠点について、京都藩邸という既存の理解に対し、ひとまず留保を加える。そして、溝口家の事例を通じて、京都拠点の実態を考察することとする。

## 二 拠点の三類型

表一は、文化八年（一八一）板行『文化増補 京羽二重』にみる、「御大名方京都御抱屋敷並御用達」の情報を整理したものである。当書誌に立項されている武家の数は二一〇、そのうち大名家のものは一八三を数える。この数が、文化八年時点で京都に拠点を構えていた大

名家の数、ということになる。表一の情報を更に整理すると、大名家の拠点は次のように分類することが可能である。

第一は、屋敷を有する類である。例えば、「尾州名護屋」の大名「尾張中納言斉朝卿」の項には、「屋敷 錦小路室町西へ入町」とある。尾張徳川家が京都に屋敷を構え、それは錦小路通室町西入に所在していたことを示す記載である。「屋敷」の文字と所在地の情報が共に記載されている大名家の数は、六四を数え、全体の約三五%を占める。屋敷には、「留守居」ないし「家来」が詰め、彼らが屋敷の管理・運営を担った。留守居などの詰員が不在の場合には、対馬宗家の事例の如く、「屋敷守」を置いて屋敷の管理を委ねた。この類を、ここでは仮に屋敷型とする。

第二は、家臣が駐在するものの、屋敷を有しない類である。例えば、「豊後臼杵」の大名「稲葉伊予守雍通」の項には、「烏丸下長者町上家来 田中善兵衛」とある。臼杵稲葉家の家来が烏丸通下長者町上ルに所在することを示しているが、ここには「屋敷」の記載はない。屋敷表記の有無は、『京都順覧記』や『掌中都一覽』など、他の地誌にても明確に区別されている。このことは、屋敷として公認されない、駐在施設の存在を示唆している。このような大名家の数は、一三を数え、全体の約七%を占める。数としては僅少ながら、看過し得ない位置にある。この類を、仮に駐在型とする。

第三は、屋敷や駐在施設を構えず、出入商人を確保している類である。この類は厳密な意味では大名家の拠点とは見做し難いものの、大名家の中には御用の一部取扱を出入商人に委ねる例もあった<sup>③</sup>。したが

って、ここでは、この類を仮に委託型と設定する。ここに分類される大名家は一〇一に上り、全体の約五三%と、最大の位置を占めている。

### 三 溝口家の場合

表二は、さまざまな京都地誌にみる、溝口家の情報を整理したものである。これに拠ると、溝口家の項目は、貞享二年（一六八五）板行『京羽二重』に初見され、以後、慶応三年（一八六七）に至るまで、間断なく立項され続けている。このことは、溝口家が一七世紀後期から明治維新を迎えるまで、京都に拠点を持ち続けたことを意味している。

表二に先の類型区分を適用してみると、次のような変化を看取することができる。まず、貞享期から明和期に至るまで、呉服所ないし用達というかたちで、松屋藤右衛門を出入商人とした。その後、天明期に屋敷を構え、留守居・深尾右源太が詰めた。文化期には、屋敷の表記が消え、留守居ではなく家来・深尾貞二郎が駐在した。文久・元治期に「屋敷」記載の表記揺れが生じ、慶応期には表記が安定する。つまり、一八世紀中期までは委託型であった溝口家の拠点が、一九世紀初頭までに屋敷型ないしは駐在型へと転じ、さらに幕末期に屋敷型へと移行した、と推定できる。

ところで、表二にて注目したいのは、拠点の頻繁な移動である。天明期には下立売御門西手に位置している拠点が、その後、相国寺西手（文化期）、二条城北手（天保期）、京都郊外（文久・元治期）、御所西側（慶応期）へと、頻りにその所在を移している。

これと関連するのが、寺田家の居住履歴である。寺田家文書中の御用留などに拠ると、文化一〇年（一八一三）に京都御用を拝命した寺田喜右衛門は、「黒門通森中町」に居住していた。その後、天保三年（二八三二）、喜三郎の時に一時借家を経て、「小川通今出川上ル中小川町」に転居する。子の弘吉郎（後に喜三郎を襲名）は、安政二年（二八五五）の家督相続時には大徳寺近くの紫竹村に居住地していたが、その後に寺之内淨福寺に居を移している。寺田家の居住地の変転は、地誌にある溝口家の拠点所在の表記と一致する。つまり、溝口家の拠点＝京都御用を勤めた寺田家の居宅、ということになる。

寺田家は、京都御用拝命の際に交わされた覚書に「表札差出候儀、勝手次第之事」とあるように（後掲史料三―④）、居宅に表札の掲示を許された。この表札に如何なる文言が記されていたか、現時点では詳らかではない。<sup>④</sup>地誌に寺田家の居宅が溝口家の拠点として掲載されていた事実を鑑みるに、この表札は寺田家による溝口家の京都御用取扱を他に広く知らしめるための標示装置であった、と推測することができる。<sup>⑤</sup>

さて、寺田家文書中には、溝口家の屋敷設置に関わる史料が存在する。

【史料一】「口上覚」調査番号711―005

#### 口上覚

溝口主膳正儀、当地二屋鋪無御座、差支之儀も御座候間、東堀川一条上ル町私所持、表口式拾五間壱尺三寸、裏行三拾三間式尺居宅、此度主膳正江差出、同人屋敷二仕度、町名代等之儀者、是迄

之通仕置候、尤右体町名代私相勤候上者、以後町入用等万事町並之通差出候儀ニ付、於町中何ら差障も無御座旨、町役人共申之候間、宜御沙汰可被下候、以上

亥八月廿七日

溝口主膳正内 寺田喜三郎

永井主水正様

瀧川播磨守様

御役人中様

右は、文久三年（一八六三）八月二十七日、京都留守居・寺田喜三郎が京都町奉行へ提出した書付である。溝口家は京都に屋敷がないため、喜三郎が東堀川一条上ルに所持する居宅を溝口屋敷としたい、という主旨である。

まず注目されるのは、文久三年八月時点に於ける、「当地ニ屋鋪無御座」という認識である。このことは、文化一〇年以来、溝口家の拠点としての実態を持つ寺田家の居宅が、自他共に「屋敷」として捉えられていないことを意味している。

さらに、「此度主膳正江差出、同人屋敷ニ仕度」旨を、町奉行に伺い出ている点にも注目される。このことは、大名家の「屋敷」として公式に認知されるためには、町奉行による認可が必要であったことを意味している。

では、このようにして成立した屋敷には、如何ほどの人員が詰めたのだろうか。

【史料二】「御用状留」調査番号214

子七月四日

覚

留守居

寺田喜三郎 三十歳

村井 寛助 三十七才

門番足輕

清二郎 三十一才

卯 助 十八才

小者

卯兵衛 五十八才

右之通ニ御座候、已上

溝口主膳正内 寺田喜三郎

右は、元治元年（一八六四）七月四日、寺田喜三郎が京都所司代へ提出した書付である。文久年間、諸大名家に禁裏警衛が命じられると、長期に亘って大名家臣団が滞京する状況が生じた。京都所司代・松平定敬は、大名家の在京人員を把握するため、各大名家にその届出を命じた。溝口家に於ける届書が、右の史料である。

これに拠ると、屋敷が設置された直後の元治元年時点に於いて、溝口屋敷には総勢五名の人員が詰めていたことが判る。このうち、京都御用を担い得る人物は、喜三郎と村井寛助の二名のみであった。村井は、文久三年に「京都御留守居役」に進んだ喜三郎の後任として、元治元年正月に「京師御用聞物書兼帯」として召し抱えられた人物である。下命の達書には、「寺田喜三郎病氣其外差合ニ而、御呼出等差支之節、助勤可相心得候事」とあることから、喜三郎の助勤として京都御用に従事していたことが窺える。<sup>⑥</sup>

なお、京都屋敷の詰員が五名というのは極めて少なく映ったと見え、所司代取次から「最早外ニ無之哉」と念を押されている。<sup>⑦</sup>

## 小括

以上の検討を整理しよう。近世に於ける大名家の京都拠点の在り方は、従来の「藩邸」イメージに収斂されるような単元的なものではなく、屋敷型・駐在型・委託型といった類型化が可能なほど、多様性に富むものであった。

溝口家の事例を通じては、〈委託型→駐在型→屋敷型〉というように、時々必要性に応じて拠点の在り方に変化がみられた。駐在型については、屋敷としては公式に認定されないものの、京都御用の担い手が住まう居宅が拠点として認知されており、そのための装置として「表札」が機能していた可能性が明らかとなった。屋敷型となるには、そこに屋敷地が存在するだけでなく、京都町奉行への届出と彼らの認可が必要であった。

## 第二章 御用

### 一 京都御用について

京都に於ける大名家の活動については、幕末に広く用いられた「京都手入」との語句に象徴されるように、朝廷や公家への周旋、あるいはその前提となる情報収集などが検討されてきた。

一方で、近世初頭以来より行われてきたであろう、「京都御用」の実態については長らく看過されてきた。研究蓄積は乏しく、近年になってようやく幾つかの事例が提示されつつある。

例えば、加賀国金沢の大名・前田家の場合、寛文期の京都留守居役が担った役割は、京都蔵屋敷での財務管理、呉服や調度品などの調達

であったという<sup>⑧</sup>。同時期に於ける阿波国徳島の大名・蜂須賀家でも、京都での借銀・進物等の調達が役目とされ、さらに女性奉公人の雇用、江戸―国許間の連絡中継などが求められたという<sup>⑨</sup>。享和期になると、新たに幕府役人との折衝・禁裏への儀礼対応・公家との交際、といった役割が生じており、京都御用の「多様化」ともいえるべき状況が現れたという<sup>⑩</sup>。

ここでは、溝口家を事例に、文化年間に於ける京都御用の実態を提示し、その理解の一助としたい。

### 二 溝口家の場合

【史料三】「諸事御用留并日並」調査番号001（以下は貼紙文言）

覚 切紙

- ① 一年頭御礼銀壹匁、支配頭江差出可申事
- ② 一養子縁組改名等、都而願伺事者、支配頭江可申出事
- ③ 一家内召仕之者迄、宗旨書付印形致し、毎年五月中迄ニ支配頭江可差出事

〔戊六月廿五日、御用人衆方以来宗門改書付、御進物方へ差出シ可申旨被仰下候〕

- ④ 一表札差出候儀、勝手次第之事
- ⑤ 一京町御奉行江年始斗御使者可相勤候事  
但シ御所司代江茂、以前相勤候得共、不及勤候事  
〔伺之上、如前例、年始八朔共御使者相勤候様被 仰付候事が担った役割は、京都蔵屋敷での財務管理、呉服や調度品などの調達
- ⑥ 一左之御方様御縁辺有之、尤〇印御方様者御近親候間、其旨可



相心得居事

○久世前大納言様

同正三位様

〔文化十三子極月廿三日薨去

○中院中将様

同侍従様

〔三位宰相中将二御昇進

〔文化拾四丑十二月廿一日又中納言二御昇進

平松右兵衛佐様

飛鳥井前大納言様

千種前中納言様

六条太夫様

〔先達而少将二御昇進

〔又中将二御昇進

弁内侍様

油小路前大納言様

〔戌三月十一日御逝去

御室

成満寺御門主様

梅園局様

〔先達而御遷化

江州木部

紀州熊本

錦織寺御門主様

鷲尾中将様

〔宰相二御昇進

〔文政辰大納言二御転任

但年始暑寒等者、都而御書二而被 仰進候二付、御使者

ハ不及勤二、吉凶等之御使者之儀者、江戸表御用人中

申遣次第可相勤候事

⑦一御縁辺被為在候御方様者勿論、都而堂上方御昇進等有之節、

心得二申越候様可致事

⑧一京都二而非常之儀有之節、同断之事

⑨一都而御使者相勤候節、供連左之通、尤廉立候御使者之節者、  
鑑為持可申事

若党 宅人

草履取 宅人

⑩一御書等相届候節者、一僕召連不苦事

但病氣、又者差合等之節、慥成者二為持遣候而茂不苦事

⑪一御即位等之節、御使者被指登候得者、副使被 仰付候儀茂可

有之候間、兼而心得居可申事

⑫一毎春参向之公家衆御名前、江戸へ可申越事

⑬一此方様伝奏衆御馳走御勤之節者、青侍等二相成罷下候得者、

弁利之筋茂有之二付、兼而心得居可申事

〔文化十二年亥春、伝奏御馳走役御勤被遊候得共御改正以後、

御馳走向万端公儀御役方御差凶二而、青侍等二而罷下リ

候ハ不及旨御用人中御被仰下候事

⑭一御家中之者、御用二而上京并遊学之者、御医師修行登等之節、

引請世話可致事

⑮一御領分之者、万一京都江罷出、非常之筋有之候ハ、世話致

可遣事

⑯一京都二而御出入町人代替リ、又者非常之筋有之候ハ、江戸

江可申越事

⑰一左之者吉凶非常之節及承候ハ、右同断

兵庫

渡海屋 善五郎

壺屋 七左衛門

若狭

丹後屋 忠藏

〔渡海屋善五郎・壺屋七左衛門之儀、笹屋二而承り合せ候処、此もの差たる御用聞と申ものにて無之、前々御廻米御役人中、舞子の浜見物等二被参候せつ、被立寄候方二而、今程二而者左様之儀も無之ニ付、吉凶代替り等聞合等二及び申間敷哉二被申聞候事

大津駅定宿

肥前屋 弥四郎

伏見駅定宿

醍醐屋 八兵衛

⑱一大坂両御蔵元并鉄屋、右三家之御出入番頭共其余御出入之分者、笹屋勘左衛門と吉凶非常之儀共申越候訳ニ付、別段申越不及候事

⑲一金銀等為替之儀者、此方之差図之外、無用之事

⑳一此度御用聞ニ被召抱候義、久世前大納言様御家司中江拙者共と文通有之候事

㉑一中院中将様御家司中江被召抱候趣、為御吹聴可罷出事

但久世様江御吹聴ニ罷出候儀者勿論之事

㉒一京町奉行所江被 召抱候儀、御文通有之候間、其旨相心得可申事

㉓一不時御使者等可相勤儀者、是迄之通拙者共々時々申遣次第相

勤可申候、其表に御用向之儀茂、拙者共へ向可申越候、賃銀等細々之儀者、上野次右衛門・竹内織右衛門・江口繁平方江向可申遣候事

西六月

右の史料は、文化一〇年六月、寺田喜右衛門が京都用聞を拝命した際に交わされた覚書である。覚書は全二三箇条から成り、京都御用として求められる役目や京都用聞の格式などについて細やかに定められている。以下それぞれの役目について検討を加えていきたい。

### 三 使者勤

御用の第一は、使者勤である。溝口家の使いとして、在京の武家や公家とさまざまに交際することが役目である。

在京武家に対する使者勤としては、京都町奉行への年始使者がある(⑤)。京都町奉行は、諸々の伺や願・届の提出先であり、在京の大名家にとっては最も接点の多い公儀役人であった。毎年正月二日、東西両町奉行所に赴き、取次と面会し、年頭祝詞の口上を述べ、音信物を贈り、与力・同心に廻礼する。以上が年始使者として果たす事どもであつた。

当初は年始使者のみが求められる勤めであつたが、後に喜右衛門より「是迄深尾貞次郎相勤候節者、八朔二も相勤候趣承及候」との報告があつた<sup>①</sup>。これを受けて、⑤の貼紙にある如く、八朔にも年始使者同様の勤めを行うことと定められた。

⑤の但書に拠ると、交際すべき公儀役人として、京都所司代は対象外とされた。以前は使者勤を行っていたことが触れられているが、ここでは理由は不明ながらも「不及勤」と明言がなされている。

公家に対する使者勤は、多彩である。まず、「御縁辺有之」人びとに対し、「吉凶等御使者」を勤めることである⑥。「吉凶等御使者」とは、例えば成婚や官位昇進といった慶事に際しての御歓使者、また弔事に際しての御悔使者、などである。

⑥の但書に拠ると、「年始初寒等」の時候挨拶は書通をもつて済ますこととされ、「御使者ハ不及勤」と定められた。しかし、時候挨拶などの書翰を伝える行為も、実際には「御使者」として捉えられた。それは、例えば溝口家の近況を伝える御報使者、また機嫌伺としての御見舞使者、などと称された。そもそも、武家と公家との交際に於いて、書翰を相手方に届ける書通行為そのものが極めて重要視された。喜右衛門の京都用聞拜命時に交わされた起請文には、「京都二而堂上方江之御書并御進物等、遅滞仕間敷事」とあり、遅滞なく書翰や進物を届けることが求められている<sup>⑫</sup>。

公家に対するものとは別に、朝廷に対する使者勤も定められている。⑪に拠ると、天皇即位礼などに使者を派遣する際には副使を勤めること、とある。溝口家は、天皇即位礼に臨んで、御祝儀献上の使者として江戸御用人を遣わすことが常であった。例えば、弘化四年（一八四七）、孝明天皇即位礼が執り行なわれ、江戸留守居役・寺田数右衛門が「御使者」として上京した。京都用聞・寺田喜三郎は、副使として数右衛門に随伴するほか、献上物の手配などに当たった<sup>⑬</sup>。

天皇即位礼の他にも、崩御の際の御香奠献上に於いて、使者勤に従事していることが確認できる<sup>⑭</sup>。

また、溝口家が勅使御馳走役を勤める折には、江戸に上府して便宜を図ることも期待された⑬。勅使御馳走役とは、年頭勅使などとして江戸に参向した公家を接待する、大名家の役目である<sup>⑮</sup>。接待に際しては、「不作法之儀無之様、行儀宜様相慎、規矩相立」てることが肝要とされた<sup>⑯</sup>。公家応接に慣れない江戸御用人にとって、恒常的に公家と接する機会の多い京都方は、勅使御馳走役を勤めるに於いて頼むべき存在であったのだろう。

しかし、寛政三年（一七九一）、「御馳走御賄向仕法御改正」が触れられ、「御馳走大名」の役目は「公家衆登城外出之節警固、於殿中之掛引、御三家方或ハ上使等有之節取計迄」と限り、「勤方等委細之儀ハ、御勘定奉行江可致談候」とされた<sup>⑰</sup>。そのため、⑬の貼紙の如く、文化一二年（一八一五）に溝口家が勅使御馳走役を勤めたものの、喜右衛門の上府が要請されることはなかった<sup>⑱</sup>。

#### 四 情報伝達

御用の第二は、情報伝達である。国許や江戸と遠く隔たった京都の情勢について、情報を広く収集し、報知することが役目である。

求められたのは、例えば堂上公家の官位昇進に関する情報である⑦。公家の官位昇進の情報が必要とされた理由は、次のように考えられる。まず、「御縁辺被為在候御方様」に官位昇進があった場合、先に示したように御歓使者を派遣する必要がある。御歓使者は昇進



を祝賀する親書を届けるのだから、国許もしくは江戸表に於いて親書を作成する必要がある。いち早く親書を作成し、御飲使者勤を指示するために、昇進情報は必要とされたのである。<sup>19</sup>さらに、「都而堂上公家」の昇進情報が必要とされたのは、それが称名に関わる問題だからである。武家や公家の社会に於いて、官位は呼称の一部を構成し、その人を識別する機能を有していた。したがって、官位の異動を逐次把握することは、その交際上、重要事であった。

また、京都に於いて「非常之儀」があった際には、その仔細を報知することが求められた<sup>(8)</sup>。ここに云う「非常之儀」とは、専ら災害を指す。中でも火災は、寺田家の御用留に記事が多く散見されるように、近世京都では頻繁に発生した。「御縁辺被為在候御方様」の安否や罹災状況を把握することで、必要に応じて御見舞使者勤の指示がなされたのである。<sup>20</sup>

他にも、<sup>12</sup>に拠ると、江戸参向公家の名前を江戸へ伝達すること、とある。翌春の参向公家が誰なのかを把握することは、彼らへの応接の必要性を判断し、その準備を行うことに資するためである。

このように、求められる情報の多くは、公家に関わるものであった。一方で、上方の出入町人について、彼らに代替や非常時があれば仔細を報じることと定められた<sup>(16)(17)</sup>。ただし、大坂に限っては、在坂の笹屋勘左衛門より報知するため、不要とされた<sup>(18)</sup>。京都用聞に求められたのは、あくまで京都とその周辺域の情報収集であった。

収集された情報の伝達先は、江戸表であった<sup>(12)(16)</sup>。これは、京都用聞が江戸御用人支配であったこと、街道の整備によって往來に利

便があったこと、などが理由であろう。凡その情報は、「道中七日限り」で江戸へ伝えられた。

## 五 上京世話

御用の第三は、上京世話である。国許や江戸からの上京人に対し、さまざまに世話を行うことが役目である。

<sup>14</sup>に拠ると、溝口家中より御用や遊学・医師修業などで上京する者があれば引請世話を行うこと、とある。また、<sup>15</sup>に拠ると、上京中の新発田領分の者に非常事があれば世話を行うこと、とある。近世京都は医学や蘭学の先進地であり、京都に遊学する上京人が多くあったという。<sup>21</sup>新発田から如何ほどの上京人があったかは定かでないが、こうした役割が期待されることからして、相応の規模であったことは想像に難くない。

では、実際にどのような世話を行うのだろうか。文政四年（一八二二）の例を紹介しよう。<sup>22</sup>

文政四年十一月、御用人・宮北郷左衛門ほか八名が、「御内御用」のために上京した。<sup>23</sup>宮北らの上京予定が江戸表より報じられると、喜右衛門は彼らの滞在所の手配を始め、京都木屋町の「津国屋宗介座敷」を借用した。また、滞在中に必要な「諸道具」を借用・買入した。到着の同二一日は旅宿にて歓待の宴席を催した。翌日、喜右衛門は京都町奉行所に出向き、上京人に関する届を行った。届書には、「今度溝口伯耆守家来宮北郷左衛門と申者、用事被申付、上京仕候ニ付、木屋町三条上ル上大坂町津国屋宗助座敷借り請、旅宿仕候ニ付、

御届ケ申上候」とあり、上京人姓名・上京の目的・滞在先が記された。宮北らは、約一ヶ月間の滞在中、久世家や「楽人窪甲斐守殿」との出合を希望した。これを受けて、久世家雑掌とは「内懸合」として参邸の日程を調整し、<sup>(23)</sup>「可然手筋も無之」人物である窪へは知人を通じて面会を申し入れるなど、喜右衛門は彼らへの仲介役としての働きを見せた。十二月二十九日、宮北らが出京すると、喜右衛門は京都町奉行所を訪れ、「溝口伯耆守家来宮北郷左衛門と申者、用事被申付、先比上京仕候段、御届申上置候処、今廿九日出立仕候、此段御届申上候」と、上京人の退京を報告した。

以上のように、喜右衛門は上京人の世話として、滞在所や必要物の手配、町奉行所への入出京の報告、公家や官人への仲介役、などに従事した。町奉行所への届は事務的な事柄であるから、溝口家が期待したのは、京都に於けるモノ（滞在所や必要品）とヒト（公家や官人などの接点）の斡旋という役目であったと考えられる。

なお、文久・慶応期には、溝口家当主や家老の上京が相次いだが、寺田喜三郎に求められたのは、やはり彼らの滞在先の手配と公家応接のための仲介であった。<sup>(25)</sup>

### 小括

以上の検討を整理しよう。文化年間に於いて、大名家が期待した京都御用とは、使者勤・情報伝達・上京世話であった。これらに通底しているのは、公家を始めとする在京の人びととの交際であった。そうした京都での外交化ともいえるべき志向は、一七世紀段階と比べて明確

に重点化されていることから、一八世紀に於ける公武関係の変化を通じて生じた傾向と考えられよう。

なお、附言すれば、金銀為替の取扱については差図がない限り無用とされ<sup>(19)</sup>、御用に関わる決済は江戸御用人との相談とされた<sup>(23)</sup>。このことは、京都に於ける収支運営は独立採算とされず、江戸表の管理下にあったと言える。これは、おそらくは溝口家の財政規模と密接に相關する問題であるが、詳細は後稿に譲りたい。

## 第三章 縁家

### 一 縁家について

「縁家」とは、婚姻関係を有する家のことを指す。近世史研究では、武家と公家との間に成立する姻戚に対して、特に用いられる語句である。

武家と公家との縁家は、近世初頭より広く見られた。有名な例として、近衛家と薩摩島津家、鷹司家と長州毛利家、三条家と土佐山内家などが挙げられる。幕末期に朝廷の政治的影響力が大きくなるにつれ、大名家が朝廷への接近を図り、縁家は「公家と武家の政治運動の連絡路として機能」したとされる。<sup>(26)</sup> こうした理解に基づき、近年では、縁家を通じて助力金の要請・提供など、その具体的な関係の様相が明らかにされつつある。<sup>(27)</sup>

ところで、縁家とは如何なる人びとを指すのだろうか。進んで言えば、ある大名にとって、如何なる範疇の人びとが縁家たり得るのだろうか。

一言に姻戚と言っても、その関係は複雑で多様である。ある大名家にとつて、婚姻関係のある公家は単独とは限らず、複数の場合も少なくなかった。重層的な婚姻関係にある場合、それらがみな縁家と見做されたのだろうか。また、それらの関係性は全て等しいものであったのだろうか。

ここでは、溝口家を事例に、縁家とされる人びととの具体的な血縁を明らかにし、縁家とは何か、という根本的な問いを考えてみよう。

## 二 溝口家の場合

溝口家にとつての縁家とは、如何なる位置にある人びとだったのか。この問いに答える鍵となるのが、前掲の史料三である。その⑥に於いて、「左之御方様御縁辺有之、尤〇印御方様者御近親候間、其旨可相心得居事」とあり、続いて一四を数える名が列記されている。この一四名が、文化一〇年時点に於いて、溝口家の縁家とされた人びとである。

まず名前が挙げられているのは、溝口家と婚姻関係を有する家に属する人びとである（系図参照）。久世・中院・平松、この三家は溝口家の姻戚である。溝口家には、溝口宣直の代に平松家から、重元の代に中院家から、直侯の代に久世家から、それぞれ継室を迎えている。また、中院家とのあいだには、溝口秀勝の娘（瑞亭院）が中院通村の正室として嫁しており、二度の婚姻関係がある。

婚姻の過去を有する三家の人びとが、須く「御縁辺有之」とされている。このことは、ひとたび婚姻関係で結ばれた姻族は、すべて縁家

と認知されることを意味している。

しかし、姻族たる三家のあいだには、親疎の別が見受けられる。「久世前大納言様」こと久世通根（一七四五～一八一六）、「中院中将様」こと中院通知（一七七一～一八四六）、この両者は「御近親」と位置付けられている。しかし、「平松右兵衛佐様」こと平松時章（一七五四～一八二八）は、「御近親」とは見做されていない。

また、時の久世家を構成していたのは、通根とその子「同（久世）正三位様」こと久世通理（一七八二～一八五〇）の二名である。この両者が共に「御縁辺有之」人物とされている。一方で、中院家には、通知と「同（中院）侍従様」こと中院通繁（一七八九～一八六二）の他に、久我家から養子となった中院通維（一七四〇～一八二三）があった。しかし、通維には、「御縁辺」が認められていない。平松家の場合も、時章には時門（一七八七～一八四五）・時保（一八〇二～一八五二）の実子があつたが、彼らは「御縁辺有之」と認められていない。

このことは、縁家とされる姻族のあいだには、その家の構成員を如何ほどに「御縁辺被為在候御方様」と認定するか、という点で親疎の別があつた。これは、彼らが姻戚として結ばれる契機となった、婚姻の過去性に拠るものであろう。溝口家にとつて最も近い姻戚である久世家は、時の当主・駒之助（後の直諒）の外戚である。「御近親」とされた通根は、駒之助の外祖父である。一方で、中院・平松両家との婚姻は、既に忘却に埋没したものであつた。<sup>28</sup>

ところで、姻族三家以外にも、九名の名が挙げられている。そのう

ちの多くは、「御近親」久世通根の血族である。通根にとって、実子・姉・甥姪など、さまざまに直接的血縁を有する人びとである。「飛鳥井前大納言様」こと飛鳥井雅威（一七五八〜一八一〇）のように、通根の姻族たる人物も確認できる。「御近親」とされた通知や「錦織寺御門主様」寂慈も、その父・通古（一七五〇〜一七九五）は通根の実弟であり、通根とは伯甥関係にある。

このように、「御縁辺」の繋がりは、「御近親」の通根から彼と直接的血縁を有する人びとへと派生している、と理解することができよう。尤も、同じく「御近親」とされた通知の場合に於いては、他家へ養子に出た実子・愛宕通祐（一七九九〜一八七五）に「御縁辺」が認められていない。「御近親」のあいだにも、その位置をめぐっては、大きな差異が存在することに留意が必要である。

### 小括

以上の検討を整理しよう。「御縁辺有之」とされる人びとは、二つの論理によって認定されていた。一つは婚姻である。ひとたび婚姻を通じて結ばれた姻族は、すべて「御縁辺被為在候御方様」とされた。ただし、その中に於いても、関係の濃淡が見受けられた。時の当主・溝口駒之助にとつて最も「御近親」とされたのは、外戚の久世家であった。一方で、中院・平松両家は、各家の構成員の中でも「御縁辺」の枠外とされる人があり、明確な親疎の別があった。

もう一つは、「御近親」からの派生である。文化一〇年時点に於いて、溝口家と最も親しい縁家は、駒之助の外祖父・久世通根であった。

「御近親」とされた通根の血族は、一代限りであったが、溝口家の「御縁辺」とされた。溝口家と直接的な婚姻関係になくとも、「御近親」から放射状に連なる人びとが、「御縁辺被為在候御方様」とされたのである。

### 結

本稿では、近世京都に於ける、大名家の拠点・御用・縁家のそれぞれについて、溝口家の事例を通じた実態を明らかにした。それぞれの検討結果については各小括に譲ることとし、ここでは今後の展望を述べることにする。

本稿で提示した事例は、越後新発田の大名・溝口家という、一般的に中小大名の部類とされる大名家のものであった。拠点施設の設置は近世中後期〜幕末と遅く、その規模は矮小であった。御用の内容は公家との交際に関わるものが中核であり、収支運用は江戸の管理下にあるなど、その活動は一定の限定下にあった。こうした背景には、本文中でも僅かに触れたが、大名家の家格や財政規模に由来するところが多いように思われる。

一方で、大名家にとつて縁家とされる公家は、極めて幅広い人びとであった。彼らとの恒常的な交際は、京都御用として求められた役目であったが、その実態を検討するには、その対象となる公家をより広範かつ多様に設定する必要があるように思われる。

残された課題は多い。



〔附記〕 本稿は、科学研究費助成事業（基盤研究C）課題番号25370805「京都留守居を通じた公武関係史の研究」（研究代表者・青山忠正）による研究成果の一部である。

〔注〕

- (1) 青山忠正・浅井良亮「新発田藩京都留守居寺田家と旧蔵文書」（『歴史学部論集』四、二〇一四）。
- (2) 鎌田道隆「幕末京都の政治都市化」（『近世京都の都市と民衆』思文閣出版、二〇〇〇）。
- (3) 溝口家の場合、「溝口家用達枯梗屋喜助」を通じて、久世家への書通を行った経験を持つ（『武家方江御使之留」、国文学研究資料館所蔵『山城国京都久世家文書』33F-86）。
- (4) 寺田家は、京都用聞拜命と同時に、「寺田」姓を名乗ることとなった。したがって、ここでいう「表札」が、居住者の姓を記した一般的な表札であった可能性を全く否定することはできない。
- (5) 寺田家文書に残る御用留の表紙には、「新発田京役所」や「新発田用所」といった記載が散見される。寺田家は、溝口家の京都御用を取り扱う自らを、役所や用所として自称していた。
- (6) 「御用状留」調査番号24。
- (7) 「御用状留記」調査番号25。
- (8) 千葉拓真「加賀藩京都藩邸の構成員と機能」（『加賀藩研究』三、二〇一三）。
- (9) 三宅正浩「近世前期の京都と西国大名」（『日本歴史』七九五、二〇一四）。
- (10) 前掲、千葉「加賀藩京都藩邸の構成員と機能」。
- (11) 「諸事御用留并日並」調査番号001。
- (12) 「起請文前書」調査番号671-004。溝口家は、京都用聞・深尾貞二郎が文化六年頃に音信不通となったことにより、久世家への書通が途絶した経験を持つ（『武家方江御使之留」、国文学研究資料館所蔵『山城国京都久世家文書』33F-86）。したがって、深尾の後任となった

喜右衛門には、公家への書通を遅滞なく確実に行うことが期待されたのである。

- (13) 「御即位御使者諸留記」調査番号296など。
- (14) 大行天皇崩御二付御香奠献備手続取調留記」調査番号301-001など。
- (15) 田中晚龍「公家の江戸参向」（『竹内誠編「近世都市江戸の構造」三省堂、一九九七）。
- (16) 『徳川禁令考』後集第一、創文社、一九五九、四六九頁。
- (17) 『徳川禁令考』後集第一、四七〇頁。平井誠二「江戸における年頭勅使の関東下向」（『大倉山論集』一三、一九八八）に詳しい。
- (18) 東京大学史料編纂所には、文政一〇年の「勅使御馳走直勤帳」が伝わっているが、そこでも寺田家が上府している形跡は確認できない（『勅使御馳走直勤控』溝口家文書328）。
- (19) 例えば、文化一〇年八月二五日、寺田喜右衛門は「鷲尾中将様、今度宰相ニ御昇進」「六条三位様、同宰相ニ御昇進」の旨を江戸表へ報じた。九月二二日、江戸御用人より「鷲尾中将様宰相ニ御昇進、六条中将様同宰相ニ御昇進被成候付、御欲御使者相動可申旨」が伝えられている（『諸事御用留并日並」調査番号001）。
- (20) 例えば、嘉永七年四月七日に発生した大火では、出火原因や類焼範圍、さらに「久世殿七ツ半頃御焼失」「久世様ニ而先御怪我も無御座、御土蔵ハ不残無御別条、大徳寺江御立退之由」といった情報を、矢継ぎ早に江戸表へ報じている。この情報に基づき、溝口家は久世家に見舞金を供出している（『諸御用留并日記」調査番号210）。
- (21) 海原亮「江戸時代の医師修業」吉川弘文館、二〇一四。
- (22) 以下、特に断らない限り、「諸事御用留并日並」調査番号002に拠る。
- (23) 御用留の記述には「御内御用と申者、久世様之御用之由」とあり、縁家である久世家関係のものであったことが推測できる。
- (24) 「御役所日記」文政四年（国文学研究資料館所蔵『山城国京都久世家文書』32U-130）。
- (25) 「御京着前日取斗御口上書一件帳」調査番号289など。
- (26) 井上勝生「幕末公家の政治空間」（笠谷和比古編『公家と武家II



「家」の比較文明史的考察』思文閣出版、一九九九）。

(27) 清水善仁「江戸時代の縁家について」（『中央史学』二八、二〇〇五）。

(28) 天保五年八月、溝口家は平松・中院両家との縁戚を確認するべく、「此方様へ御幾歳ニ而江戸表へ御下向ニ而候哉、并ニ御名者何姫様与奉称候哉之旨」を両家に問い合わせている（「諸御用留并日並」調査番号00）。

（あさい りょうすけ 文学研究科日本史学専攻博士後期課程）

（指導教員：青山 忠正 教授）

二〇一五年九月三十日受理

表一：『文化増補 京羽二重』の大名情報

	大名	拠点		詰員		出入商人	
1	尾州名護屋	屋敷	錦小路通室町西へ入町	家来 家来	柳原治右衛門 一	用達	茶屋長味 蛸薬師西洞院角
2	紀州和歌山	屋敷	西洞院三条下ル町	家来	平塚勘兵衛 木村紋右衛門	用達 用達	茶屋宗理 河井十右衛門 東堀川出水角 両替町二条上ル
3	常州水戸	屋敷	上長者町室町東へ入	留守居	安嶋七郎左衛門	用達	左藤彦五郎 同所
4	加州金沢	屋敷	河原町二条下二丁目	留守居	青木和平	用達 一	左利佐揃 藤勝伴二郎 同所 一
5	薩州鹿児島	屋敷	錦小路東洞院東	留守居	長瀬伴右衛門	用達 呉服所 呉服所	田中甲治 瀬尾治兵衛 中嶋利兵衛 衣棚榎木町上ル町 室町中立売上ル町 中立売新町西へ入町
6	奥州仙台	屋敷	中長者町小川	留守居	斉藤作右衛門	用達 御服所	大文字屋六兵衛 葛屋甚太郎 下立西洞院東へ入町 西洞院下長者町下ル町
7	筑前福岡	屋敷	上立売新町東へ入	留守居	立花範太夫	用達	比喜多五兵衛 新町寺之内下ル町
8	肥後熊本	屋敷	知恩院古門前西町	留守居	朝山思地	用達 用達 用達 用達	谷野貞五郎 井上四郎二郎 石井鉄五郎 伊藤清助 室町出水上町 高倉丸太町下ル町 一条烏丸西へ入町 三条烏丸西へ入町
9	芸州広島	屋敷	東洞院四条下ル町	留守居	尾山助右衛門	用達 一 一	難波九良左衛門 山田十兵衛 辻藤兵衛 小川二条上ル町 東洞院四条下 両替町三条上ル町
10	肥前佐賀	屋敷	烏丸四条下ル町	留守居	石川清九郎	用達	福田小十郎 同所
11	長州萩	屋敷	河原町二条下ル二丁目	留守居	松原十右衛門	用達	松木与左衛門 祇園下河原
12	勢州津	屋敷	東堀川錦小路上ル町	留守居	箕浦作兵衛	用達 用達	菱屋長兵衛 薩摩屋弥兵衛 衣棚出水上ル町 中立売西洞院東へ入
13	江州彦根	屋敷	河原町三条下ル	留守居	松本善左衛門	一 一	佐生権九郎 七里彦右衛門 室町夷川上 衣棚出水上
14	因州鳥取	屋敷	油小路下立売下ル	留守居	大河内直左衛門	用達 用達 用達 一	榎並助之丞 清水藤次郎 若代長左衛門 山賀清兵衛 中立売室町西へ入 西洞院中立売上ル 小川上長者町 烏丸夷川下
15	備前岡山	屋敷	猪熊中立売上ル	留守居	多賀文十郎	用達 用達	天野長左衛門 藤本久兵衛 衣棚丸太町上ル 同

16	阿波徳島	屋敷	四条烏丸西へ入町	留守居	西尾源十郎	用達 用達 用達	足田宇作 佐生権九郎 増谷又四郎	西洞院下立売下 室町夷川上ル町 小川下立売上ル
17	越前福井	屋敷	釜座出水下ル町	留守居	[黒塗]	用達	森仁左衛門	二条堀川東へ入
18	土州高智	屋敷	河原町三条下三丁目	留守居	関弥惣右衛門	用達	井筒屋半右衛門	下立売釜座西へ入
19	出羽久保田	屋敷	柳馬場四条上ル町	留守居	熊谷惣助	用達	山下惣左衛門	新町二条下ル町
20	播州	屋敷	堀川二条下	留守居	有馬宇一郎	用達 一	廣沢仁左衛門 八文字屋常二郎	高倉蛸薬師下ル 釜座樺木町上ル町
21	越後高田	屋敷	中立売油小路西入	留守居	一	用達	服部瀬兵衛	堀川下長者町上ル町
22	豊前小倉	屋敷	柳馬場竹屋町下	留守居	柏木次左衛門	用達	一	一
23	若州小浜	屋敷	姉小路神泉苑町	留守居	須美初	用達	今村市兵衛	西堀川丸太町上ル町
24	武州河越	屋敷	柳馬場二条下ル町	留守居 一	樋口源左衛門 樋口東馬	用達	石野長右衛門	釜座下立売下ル町
25	伊予松山	屋敷	高倉六角下ル町	留守居	金子千右衛門	用達 用達 用達	中嶋五郎右衛門 大櫛庄兵衛 吉沢彦兵衛	室町御池上ル町 高倉御池上ル町 油小路下立売下ル町
26	出雲松江	屋敷	西洞院二条上ル町	留守居	渡辺源四郎	用達 一 一	成瀬幸右衛門 松本市右衛門 柳原猪兵衛	同所 一 一
27	和州郡山	屋敷	仏光寺西袋町	留守居	塚平丈助	用達	亀甲屋善助	中立売新町角
28	奥州盛岡	屋敷	上岡崎村	家来	清水源右衛門	用達	濱口安右衛門	室町竹屋町
29	筑後久留米	屋敷	西洞院四条上ル	留守居	長谷川半兵衛	用達	那波九郎左衛門	小川二条上ル町
30	勢州桑名	屋敷	東洞院錦上ル町	留守居	一	用達 用達	亀屋又四郎 中嶋吉兵衛	中立売新町東 室町二条下
31	美濃大垣	屋敷	富小路二条下町	留守居	白洲直右衛門	用達	金屋九兵衛	一条猪熊西へ入町
32	讃州高松	屋敷	中立売新町	留守居	井上郡助	用達	松葉屋嘉兵衛	同所
33	筑後柳川	屋敷	中立売西洞院西	留守居	富士谷千右衛門	用達	一	一
34	奥州二本松	屋敷	松屋町上長者町	留守居	吉田紀内 吉田四良右衛門	用達	西谷新四郎	同所
35	山州淀	屋敷	松屋町上長者町上	留守居	渡辺甚左衛門	用達 用達	多名瀬金十郎 仲利兵衛	室町下立売下 東洞院四条下
36	奥州白川	屋敷	六角大宮西	留守居	一	用達	藤本小平	錦小路新町西へ入丁
37	対州府中	屋敷	河原町三条上	屋敷守	李原源兵衛	用達	春日亀弥左衛門	四条川原町東へ入
38	奥州津軽	屋敷	釜座姉小路	留守居	村上長左衛門	用達	木村茂市	新町丸太町角
39	予州宇和島	屋敷	室町五条上ル町	留守居	一 [大坂住居]	用達	黒田半四郎	醒井仏光寺
40	豊前中津	屋敷	出水通堀川東	留守居 京住家来	市川平左衛門[大坂住居] 富士野仙助			
41	石州浜田	屋敷	綾小路烏丸東へ入町	留守居	坂口庄橋	用達	今井善四郎	同所
42	丹波亀山	屋敷	松原室町西へ入町	留守居	倉橋十郎右衛門	用達	越後屋利兵衛	室町仏光寺上ル町
43	羽州米沢					用達 用達	小森次右衛門 一	堺町三条下 一
44	下野古川	屋敷	油小路御池上ル町	留守居 守護人	白崎久太夫 [大津住居] 吉田茂十郎	用達	一	一
45	讃州丸亀	屋敷	丸太町烏丸西	留守居	田中茂兵衛	用達	越後屋喜兵衛	西洞院丸太町下
46	丹州笹山	屋敷	烏丸六条下ル町	留守居	河井九良右衛門	用達	一	一
47	江州膳所	屋敷	祇園小堀	留守居	市元碓	用達 用達	わく屋唯蔵 五十嵐徳三郎	烏丸御池下ル町 東洞院御池下ル町
48	備中松山	屋敷	東堀川三条上	留守居	一	用達	若松屋与兵衛	烏丸竹屋町上ル町
49	勢州亀山	屋敷	夷川河原町東へ入	家来	由良濱右衛門	用達	河合安右衛門	下立売西洞院
50	播州尼崎	屋敷	室町下立売	留守居 家来	大木仁左衛門 野田才次郎			
51	信州上田	屋敷	西之京	留守居	高橋与平	用達	徳屋吉左衛門	室町丸太町
52	丹州宮津	屋敷	西三本木	留守居	下山伴左衛門			
53	越中富山	屋敷	塔之段	家来	古谷万右衛門			
54	播州明石	屋敷	御幸町丸太町	留守居	市川利兵衛	用達	中嶋善七	麩屋町竹屋町上
55	作州津山	屋敷	寺町筋違橋上ル	留守居 家来	一 平野与四郎			
56	奥州岩城	屋敷	油小路二条下	家来	一	用達	河合吉十郎	室町二条下町
57	但州出石	屋敷	御幸町夷川上	留守居	本間多宮	用達	車屋八郎左衛門	御幸町三条上
58	伊予大洲	屋敷	御幸町竹屋町下	留守居	一	用達	杉田新六	富小路竹屋町下ル
59	江州水口	屋敷	東洞院四条下	留守居	吉沢和三郎			
60	播州龍野	屋敷	河原町二条上	留守居	福沢条助	用達		
61	江州大溝	屋敷	夷川大手町角	留守居	松下岡右衛門	用達	得能栄三郎	高倉御池下ル丁
62	丹後田辺	屋敷	仏光寺大宮西	留守居	廣瀬傳吉	用達	川口忠兵衛	大宮五辻上ル町
63	丹州園部	屋敷	醒井松原下	留守居	木村久次郎	用達	金屋太兵衛	室町夷川上ル町
64	摂州高槻	屋敷	蛸薬師大宮西	留守居	松下金太夫			
65	奥州会津					用達	篠田五郎右衛門	小川下立売下
66	羽州庄内					用達 用達	板倉次右衛門 佐田良平	新町三条上ル町 大仏下馬町

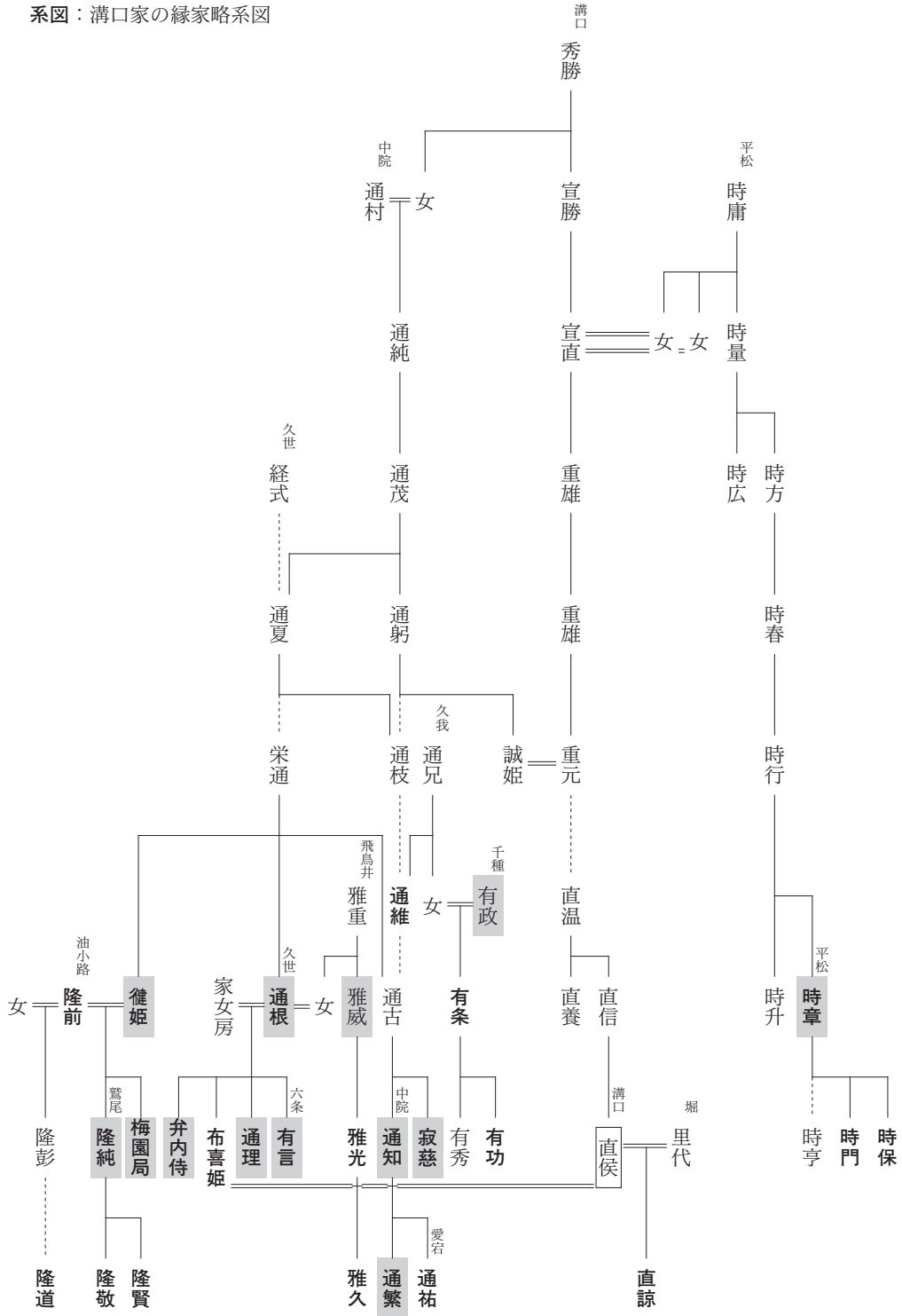
67	武州忍			留守居	[大津住京兼帯]	用達	奥田仁左衛門	室町御池上
68	備後福山					用達	濱口安右衛門	室町竹屋町上ル町
69	三州吉田					用達	日野屋又右衛門	油小路丸太町上
70	上州高崎					用達	三文字屋久左衛門	烏丸丸太町下
71	三州西尾					用達	河合安右衛門	下立売小川東へ入
72	伊予西条					用達	茶屋宗理	堀川出水
73	濃州高須					用達	茶屋長意	西洞院六角
74	肥前島原					用達	勝田長右衛門	新町押小路上ル
75	肥前平戸					用達	栗林寛兵衛	柳馬場二条上
76	信州松本					用達	藤岡庄兵衛	両替町丸太町下
77	濃州石村					用達	河井安右衛門	下立売小川東へ入
78	羽州山形					用達	川辺孫右衛門	新町姉小路上ル
79	三州岡崎					用達	上柳八郎右衛門	洛外壬生村田中町
80	日向飢肥					用達	小幡可一郎	建仁寺門前
81	備中岡田					用達	伊勢屋市兵衛	堺町六角
82	志州鳥羽					用達	江原忠七	室町丸太町上
83	下総佐倉					用達	永田多十郎	室町夷川上ル町
84	江州堅田					用達	永田多十郎	室町夷川上ル町
85	江州宮川					用達	近江屋喜左衛門	東寺内間之町五条下
86	豊後臼杵	烏丸下長者町上	家来	田中善兵衛				
87	遠州浜松					用達	九里平左衛門	堺町御池下
88	豊後杵筑					用達	嶋本作治郎	柳馬場二条下
89	参州奥殿					用達	九里平左衛門	堺町御池下
90	越前丸岡					用達	中島元之助	西洞院竹屋町上
91	濃州八幡					用達	野村藤右衛門	蛸薬師室町西へ入町
92	長州府中					用達	財満左四郎	上長者町堀川東
93	長州清末					用達	財満左四郎	一
						用達	沢村吉右衛門	油小路下立売
94	豊後佐伯	下立売西洞院西	留守居	荒川周左衛門				
95	防州徳山	中立売新町	家来	田中光治郎				
96	羽州山之上					用達	[黒塗]	[黒塗]
97	豊後府内					用達	赤松甚兵衛	両替町二条下
98	予州今治					用達	花安利兵衛	釜座押小路上ル
99	肥前唐津					用達	木村市兵衛	新町蛸薬師下
100	下総結城					用達	万屋甚兵衛	大宮御池下
101	駿河沼津					用達	奥田仁左衛門	室町御池上
102	美作勝山					用達	那波九良左衛門	小川二条上
103	三州田原					用達	土山勝次郎	五条麩屋町西へ入
104	越後新発田	寺之内上立売上	家来	深尾貞二郎				
105	下野宇都宮					用達	那波九良左衛門	小川二条上ル町
106	下野足利					用達	三文字屋久左衛門	烏丸竹屋町上ル
107	三州刈谷					用達	桂喜六	両替町二条上
108	越前大野					用達	松谷喜兵衛	三条小川
109	上州沼田					用達	泰貞祐	蛸薬師油小路
110	奥州棚倉					用達	岡村永治	釜座下立売上
111	播州安志					用達	岡村永治	釜座下立売上
112	泉州岸和田	姉小路烏丸東	家来	板倉周蔵				
113	筑前秋月					用達	北脇辰吉	蛸薬師東洞院東へ入
114	総州関宿					用達	駒井左助	烏丸綾小路下ル町
115	和州新庄	四条大宮西	留守居	市川正吉		用達	中川喜兵衛	室町二条上
116	濃州加納					用達	宇野久兵衛	室町丸太町上
117	越後村上					用達	鍵屋九右衛門	下立売小川
118	日向延岡					用達	徳屋吉右衛門	室町丸太町上
119	奥州長谷					用達	藤屋利右衛門	猪熊姉小路上
120	信州高遠					用達	河合安右衛門	下立売小川
121	三州孝母					用達	鍵屋佐助	神泉苑町
122	肥前小城					用達	辻若蔵	烏丸四条上ル町
123	肥前蓮池					用達	宇野久十郎	釜座下立売上
124	常州土浦					用達	日野屋又右衛門	油小路丸太町
125	奥州中村					用達	柴田又十郎	塔之段毘沙門町
126	豊後岡					用達	清水藤吉	小川中立売上
127	石州津和野					用達	金山十右衛門	室町下長者町
128	相州小田原	衣棚御池上	家来	山崎彦四郎				
129	下野烏山					用達	北脇市兵衛	三条白川橋西へ入
130	丹州氷上郡柏原					用達	鈴木優三郎	室町錦小路上
131	羽州高昌					用達	多名瀬金十郎	室町下立売下
132	和州芝村					用達	菱屋平助	新町三条下

133	和州柳本					用達	池田屋吉兵衛	室町一条上ル町
134	遠州掛川					用達	中川清助	室町二条
135	丹州福知山		新町松原下ル町	家来	岩手惣吉			
136	予州吉田					用達	黒田半四郎	醒井仏光寺下ル
137	和州小泉					用達	尾崎半右衛門	柳馬場錦小路上ル
138	播州三田					用達	岡村廉作	下立売釜座西
139	丹州綾部					用達	得能栄三郎	高倉御池下ル町
140	但州豊岡					用達	杉山茂右衛門	堺町二条上
141	丹州峯山					[全記載空白]		
142	日向高鍋					用達	三文字屋久左衛門	烏丸竹屋町上ル町
143	武州園部					用達	右同人	－
144	肥前大村					用達	河合安右衛門	下立売小川
145	越前勝山					用達	長尾四良右衛門	大宮寺之内
146	羽州新庄					用達	岡村若狭	小川今出川下ル
147	濃州高富					用達	三文字屋久左衛門	烏丸竹屋町上ル
148	阿州狭山					用達	笹屋傳助	神楽苑町
149	上総飯野		武者小路新町西へ入	留守居	西池仁兵衛			
150	駿州田中		一条室町東へ入	家来	高江主水			
151	播州宍粟					用達		
152	肥後宇土		竹屋町東洞院西	家来	岡権右衛門			
153	越後与板					用達	七里九穆	衣棚出水上
154	遠州横須賀					用達	杉本美作	衣棚二条下
155	奥州守山					用聞	佐藤彦五郎	上長者町室町東へ入
156	上州館林					用達	大文字屋季祐	西陣栄町
157	肥後入吉					用達	鶴屋五兵衛	衣棚丸太町上
158	豊後日出	屋敷	堺町二条下ル町			用達	升屋庄右衛門	安井門前
159	備中足守					用達	野村藤右衛門	蛸薬師室町西
160	予州小松					用達	福知長蔵	二条高倉東へ入
161	播州小野					用達	湯浅喜四郎	新町二条上
162	江州三上					用達	三文字屋久左衛門	烏丸竹屋町上ル町
163	勢州薦野					用達	亀屋甚兵衛	釜座二条上
164	播州赤穂					用達	脇坂左右七	両替町二条上
165	播州三ヶ月					用達	中嶋甚右衛門	三条両替町東
166	信州高島					用達	鱗形屋伊右衛門	室町丸太町上
167	備中新見					用達	廣瀬利兵衛	釜座出水上ル町
168	摂州麻田					用達	越後屋喜右衛門	二条堺町東入
169	讃州多度津		衣棚下立売上	家来	福本久左衛門			
170	和州高取					用達	奈里七郎	室町下立売上
171	備中庭瀬					用達	万屋治兵衛	柳馬場三条上
172	江州仁正寺		清水門前	留守居	大津忠衛門			
173	泉州伯太					用達	湯浅喜四郎	新町二条下
174	奥州下手度					用達	北脇市右衛門	衣棚二条上
175	丹州山家					－	近江屋喜兵衛	大宮三条上ル丁
176	下野壬生					用達	三文字屋甚六	猪熊丸太町上
177	河内丹南					用達	島本三郎九郎	押小路柳馬場東へ入
178	播州柳田					用達	井口久左衛門	上長者町室町西
179	豊後森					用達	山口市三郎	西陣
180	肥前五島					用達	鍵屋弥右衛門	高倉竹屋町下
181	和州柳生					用達	藤本庄兵衛	柳馬場六条下
182	越前敦賀					用達	越後屋武助	油小路一条上
183	常州下館					用達	菱屋平助	新町三条上

表二：溝口家の京都情報

年	屋敷表記	所在地	詰員	出入商人	出典
貞享2年				呉服所 松屋藤右衛門	『京羽二重』
宝永2年				呉服所 松屋藤右衛門	『京羽二重』宝永版
延享2年				用達 松屋藤右衛門	『改正増補 京羽二重大全』
明和5年				用達 松屋藤右衛門	『明和新增 京羽二重大全』
天明4年	「屋敷」表記	下立売新町西へ入	留守居 深尾右源太		『天明新增 京羽二重大全』
文化8年	－	寺之内上立売上	家来 深尾貞二郎		『文化増補 京羽二重大全』
天保2年	－	黒門下立売下ル森中町	家来 寺田喜三郎		『天保刻成 京都順覧記』
文久3年春	「御屋舗」を示す△印	洛北紫竹村	家来 寺田弘吉郎		『掌中都一覽』
文久3年夏	－	寺之内浄福寺西入	家来 寺田喜三郎		『文久改正 京羽津根』
元治元年	－	寺之内浄福寺西入	家来 寺田喜三郎		『元治改正 京羽津根』
元治2年	（屋敷箇所に記載）	東堀川一条上ル町	家来 寺田弘吉郎		『慶応再刻 京都順覧記』
慶応3年	「御屋舗」を示す○印	東堀川元誓願寺下	－		『改正増補 掌中都一覽』

系図：溝口家の縁家略系図



※1 ゴシック字の人名は、文化10年時点に於ける存命中の人物を示す。  
 ※2 網掛けした人名は、溝口家の「御縁辺被為在候御方様」とされた人物を示す。